

9月第1週のメッセージ

- 日 時：2020年9月6日（日）
- 場 所：立川教会
- 説教題：「富士喜八郎 兄を神様の御許に送る」
- 聖 書：新約 テモテへの手紙 二 4：7-8（新 p394）
- 讃美歌：457「神はわが力」・510「主よ、終わりまで」

お早うございます。

突然のことでしたが、私たちの教会の最長老であった富士喜八郎さんが、先週の日曜日の夜、午後7時22分に神様の御許に召されました。95歳でした。滞在していたショートステイの施設で8月24日（月）の夜、転倒され、頭を打ったことが原因で集中治療室に入られたのが26日（水）、それから4日後の30日夜、亡くなりました。

ショートステイに行かれる前ですが、教会員のお一人が富士さんと話しをされ、私はお元気な様子である報告を受けていたその矢先のことでした。

葬儀は、先週の木曜日に、近親者と、生前富士さんと親しくお交わりのあった方々で執り行いました。

今日のメッセージは、予定を変更し、富士さんの信仰生活について皆様にも知っていただきたいと思い、そのことをお話しします。

初めに、先週奨励をして下さった中川さんのお話しに触れることから始めたいと思います。

私は、先週は、福島教会の礼拝に出席した後、仙台経由で常磐線で南に下って鹿島で降り、そこから徒歩5分の鹿島栄光教会を訪れました。仙台から鹿島まで時間にして1時間以上の道のりです。そこで、携帯から立川教会のホームページにアクセスして、電車の中で中川さんの奨励を聴くことにしました。7月以降、今はスマホの携帯さえあれば、いつでも、どこにいても、立川教会の礼拝に参加することが出来るのです。今回の旅は、そのことを改めて私自身、知る時となりました。

中川さんの話しは、とても楽しかったです。その中で、彼との付き合いはとても長いのですが、中川さんが教会に行くきっかけとなったアトウッド先生との出会いについては初めて聞いたように思います。そして、最後のところで、「キリストの香り」としてアトウッド先生を語られところが、私の心に響きました。

中川さんは、奨励を次のようにまとめています。

『キリストの香り』は、イエス・キリストに従った人の人生を私達が振り返った時に、『あの人生はキリストの香りのようにだった』としか表現できないものです。そしてこの『キ

『キリストの香り』という表現ほど、その人の生き方を適切に表しているものはありません。まさにアトウッド先生の人生は『キリストの香り』でした。おおらかで明るい『キリストの香り』でした。他の誰にも真似のできない『キリストの香り』でした。実に個性的な『キリストの香り』でした。」

以上ですが、この言葉は、聴く私たちの心が温まる中川さんのアトウッド先生に対する言葉でした。それは、中川さんの人柄から出て来る言葉だと思いました。

富士喜八郎さんについてお話しします。

お配りした「富士喜八郎さんの歩み」をご覧ください。

見ず知らずの方もおられると思いますので、簡単に略歴を振り返ります。

- ・1925（大正14）年4月2日：東京市麹町区富士見町（現千代田区九段南2-15）にて出生。父高茂・母よし子の三男。
- ・1932（昭和7）年4月：私立 暁星小学校入学。
- ・1943（昭和18）年4月：東京高等蚕糸学校製糸学科入学。
- ・1944（昭和19）年4月：徴兵検査を受ける。軍需工場である前橋市丸登製糸工場・片倉工業郡山工場に勤労働員。終戦を迎える。
- ・1945（昭和20）年9月：東京繊維専門学校製糸学科（現東京農工大工学部）卒業。その後、栃木県繭検定所に就職（助手）。
- ・1947（昭和22）年4月：千葉県庁経済部蚕糸課に技官として勤務。
- ・1949（昭和24）年7月17日：日本キリスト教団千葉教会（久保田豊武牧師）にて受洗。
- ・1950（昭和25）年12月8日：同教会において伊藤愛子と結婚。
- ・1951（昭和26）年4月：栃木県繭検定所に技術吏員として勤務。
※長女 文子（1952/5/3）、長男 公義（1953/9/6）、
次男 宣義（1956/4/2）誕生。
- ・1958（昭和33）年8月：東京繭検定所勤務。立川市に転居。
日本キリスト教会小山教会から日本キリスト教団立川教会に転会。
※以降、教会役員として歴代の牧師と共に歩み、教会を支え続ける。
- ・1980（昭和55）年11月：立川市から八王子めじろ台に転居。
- ・1986（昭和61）年3月：東京都退職。
- ・1991（平成3）年4月：「高尾山の自然をまもる市民の会」事務局に奉仕。
- ・2020（令和）2年8月30日午後7時22分：入院先の病院にて召天。
享年95歳。

しかし、私は、何よりも、富士喜八郎さんの信仰について思い知らされた事があります。亡くなられた次の日、先週の月曜日のことです。私は、葬儀のことなどの相談に富士さん宅を訪れました。その時、御長男の公義さんのお連れ合いから、最近になって富士さんが突然パソコンを買って欲しいと言われたことを聞かされました。立川教会の礼拝がインターネットで配信され始めたことを知り、そのように言われたとのことでした。

突然の希望でもあり、操作も複雑で、実現には至りませんでした。富士さんにとっての礼拝は、何よりも大切なものであることを改めて知らされたのです。

略歴にもあるように、富士さんが愛子夫人ともども立川教会に転会されたのは、初代の江口忠八先生の時代である 1958 年 8 月の立川への転居をきっかけとしたことです。そして、早くも翌 1959 年から役員に選ばれ、1992 年までの 33 年の長きにわたって役員としてこの教会の中心となって働かれました。その間、江口忠八、江口ハナ、柏井宣夫、愛澤豊重の 4 人の牧師先生と共に歩み、その牧会を助けました。役員の務めを終えた後は、一教会員として、高田牧師、梁牧師、そして私の時代に変わらぬ歩みを続けて来られました。

立川教会は来年創立 70 年を迎えますが、10 年前の『創立 60 周年記念誌』に、富士さんは御自分の葬儀に触れ、次のような文を寄せています。

「私事になるが、私の母が亡くなった時、教会で葬儀をしていただいた。江口忠八先生に相談したところ、お花は講壇の両脇一対にするようにと言われた。それではちょっと寂しいのではと思ったが、先生はそれが厳粛なのだと言われたのでそれに従った。先生の葬儀の時も、ハナ牧師の時にもそのように花一対だけにした。自分の時にも同じようにして欲しいと既に（高田）先生にお願いしてある。」

そして、今回も、愛子夫人の時と同じように、花は一対だけでした。

私は、葬儀の飾り付けは、本人及びご家族の方の希望の通りで良いと思います。

もし、故人が花が好きで、好きな花をいっぱい飾りたいとの希望であれば、勿論それで良いと思います。ただ、私は、富士さんが、江口牧師から言われたことをご自分の信仰の問題としてとらえ、守られ続けたことの凄さを思うのです。

1949 年、日本キリスト教団千葉教会で洗礼を受けて以来、71 年にわたるキリスト者としての歩みは、ただ一筋にキリストの歩みを追いつけてのものでした。そして、その生涯を思い返すのです。足が不自由となり、外出も思うようにならない中で、最後まで礼拝に出席したいとの祈りを持ち続けられたその歩みは、中川さんの言葉を借りるなら、見事なまでの「キリストの香り」を私たちに漂わせる人生でした。教会に見える時には、必ずカメラを持参し、一緒に写真を撮ることを望まれました。電話口の向こうでは、お元気な声で、御自分

の健康を教えて下さり、礼拝に出席したい希望を語っておられました。さらに、神様の御許に召されるのは、喜びなのだから、悲しみではないとも言われていました。

まさに、富士さんは、死に至るまで神様に忠実な信徒としての「キリストの香り」を漂わせておられたのです。

そして、又、思うことがあります。

3年前に、富士さんに先だって神様の御許に帰られた愛子夫人のことです。

私は、愛子夫人とは、すでに病床に伏せている時に一度だけお会いしただけですが、愛子夫人の葬儀の時に、富士さんが一冊の歌集を私に貸して下さいました。そこには愛子夫人が詠まれた歌が幾首も載っていました。その中から5首を紹介します。

最初の3首は、夫である富士さんを題材にしています。夫は、つまと詠んでいます。

短歌「庭の花々」『この指とまれ』合同歌集より（2007年3月）

- ・忙がしく 庭木刈り込む夫（つま）の背に 影を落して動く白雲
- ・退院の 夫（つま）は厨（くりや）にパンを焼き 癒えたる証と 昨日も今日も
- ・久びさの 晴れに戸を繰る夫（つま）の部屋 立田川の軸 静かにゆるる

次に、ご自分に関わる歌2首です。

- ・とり出（いだ）せ 古きコートのかくしには 母の好みの匂い袋が
- ・文化祭の 合唱を聞き遠き日の 中国想い 涙止まらず

亡き母を思い出し、又若き日は、看護師として、中国の山西省の戦場を飛び回り、傷病兵の手当てをした愛子夫人の人生を感じる歌です。

私は、富士さんの生涯は、縦糸としての神様への信仰、それは礼拝を守り抜く生活ですが、それを縦糸とし、横糸は愛子夫人の富士さんを静かに愛し続けたその愛によるものであったと思うのです。

富士喜八郎さんの葬儀を終えた今、不思議なことですが、私自身、何か富士さんから励まされているような気がするのです。信仰を全うし、走るべき行程を走り終え、安らぎに満ちたその姿を目の当たりにしたからでしょうか。そして、神様の御許にあって、最愛の愛子夫人との再会を心から喜んでいる姿が目に見えそうです。

このように思えるのも、御長男の公義さんご夫妻他、ご遺族の方々との交わりがとても温かなものであり、教会での葬儀に関わることを心置きなくさせていただいたからだと思い、感謝しています。

それでは、私たち、まだまだ人生の歩みは続きますが、ゆっくり、一日一日を大切に、歩んで行こうではありませんか。そして、神様の御許に召される時が来たら、富士さんのように、喜びをもってその時を迎えることが出来ればと思います。

祈りましょう。